

車部品製造の廃油・廃液 再利用

企業連携により製造現場での二酸化炭素(CO₂)削減を進める試みが動き出す。ホンダ系列の山田製作所(群馬県桐生市、北元徹社長、0277・54・2111)は、環境ベンチャーのゼオテック(東京都中央区、井上雅仁社長、03・3668・5711)と組み、自動車部品製造で排出する廃油・廃液を焼却処理せず再利用する体制を構築する。経済産業省が今秋開始する中小企業の温暖化対策支援の新制度活用も視野に、削減分は温室効果ガス排出枠としての取得も検討する。

両社が実施するのは、

部品製造に不可欠な切削油や焼き入れ油、部品洗浄液の完全リサイクル。高い加工精度が要求される自動車部品では、これら溶液の定期交換は不可欠で、産業廃棄物として委託処理していた。産業廃棄物の約7割を占める、これら廃油・廃液の

山田製作所

ゼオテック

企業連携でCO₂削減

熊本事業部(熊本県菊池市)でも稼働する。ダイカスト離型剤でも同様の再利用を検討しており品質評価中だ。

経産省の新制度は「国内CDM」と呼ばれ、中小企業と大企業、もしくは異業種企業間で連携して実施する省エネの取り組みを評価するのが狙いで、先進国が途上国での省エネ投資を通じ排出枠を獲得するクリーン開発メカニズム(CDM)の国内版。

山田製作所の廣町勝巳執行役員は自助努力による省エネ対策に加え「産業界に一層厳しい削減目標が課せられた場合の達成手段として国産の排出枠活用も考えたい」と話す。

再利用は資源の有効活用はもとより、焼却時に排出するCO₂の削減効果が大きいと判断した。年間排出量1200トの廃液の焼却処理には、約230トのCO₂を排出すると試算されるため、これが削減分となる。

荷電膜式によるゼオテックの処理技術を導入し、完全リユース化を実施する。桐生事業部(桐生市)に処理装置を設置したのに続き、8月には